

6

あざの治療 (皮膚科、形成外科)

あざには赤あざ、茶あざ、青あざ、黒あざなど様々なものがあります。

あざの治療としてはレーザー治療がよく行われています。レーザー治療の利点はあまり皮膚を傷つけず、出血もほとんどない治療ができることです。しかし、1回のレーザー照射であざが消えることはほとんどなく、照射を繰り返す必要があります。レーザー照射には痛みが伴うために、麻酔テープや麻酔クリームを使って麻酔を行います。

1. 赤あざ

赤あざは主に皮膚表面の血管が増えたり、拡張したりして赤く見えるものです。赤あざにもいろいろな種類があり、表面だけ赤いものや、深くまで赤いもの、成長とともに隆起してくるものなどがあります。

単純性血管腫と呼ばれる皮膚の浅いところにある赤あざに対しては、レーザー治療が最も有効です。一般的には皮膚の薄い、赤ん坊や子どもの時期のほうがよく効きます。

いちご状血管腫は生まれたときにはなかった赤あざが1、2週ごろより出てきて、徐々に盛り上がってくるのが特徴です。一般的には小学校低学年ごろには赤味は引いていきますが、大きいと皮膚に傷あとのように残ることもあります。急激に大きくなる時や傷ができて出血が止まらないときには専門の形成外

科や皮膚科を受診されることをお勧めします。1歳までの場合には薬を飲むことで大きくなるのを抑えたり、完全に治ることもあります。レーザー治療も効果があります。傷あとが残った場合には手術を行うこともあります。

一方、深い血管腫ではレーザー光線は深くまでは到達しないために効きません。この場合は手術療法や、薬物を注射して血管腫をつぶす治療（硬化療法）などを行います。手足にできる急激に大きくなる血管腫では、出血や貧血を起こすカサバツハ・メリット症候群という病気があります。この病気は進行すると生命に危険なこともあり、早めに小児科を受診することが必要です。

2. 茶あざ（扁平母斑）

扁平母斑は平らな薄い茶色のあざで、体のどこにでもできます。このあざはレーザー治療が最も効果があります。ただし、一旦消えても再発することもあります。

3. 青あざ（太田母斑、異所性蒙古斑）

顔にできる青黒いあざを太田母斑といいます。表面は平らで浅いところに色素があるためにレーザー治療が最も効果的です。体や四肢にできる青あざは異所性蒙古斑といい、おしりの蒙古斑と同じものですが、異所性蒙古斑は成長しても消えずに残ることがあります。この場合もレーザー治療が最も効果があります。

4. 黒あざ（色素性母斑）

小さいものはホクロですが、大きくなると毛が生えているものもあります。レーザーでは完全に消えることはありませんが、薄くなることはあります。一般的な治療は切除することです。小さいものでは縫い縮められますが、大きいものでは、おしりやおなかなど他の部分からとった皮膚を植える手術（植皮術）を行うこともあります。



一口メモ

母子手帳を活用しよう

私の子どもはちゃんと育ってるのかしら？
保護者になった誰もが抱く心配事です。まずは母子手帳を開いてみましょう。発達の目安は年齢ごとの左ページに記載されていますし、発育曲線のグラフを描いてみると身長や体重の成長度合いを簡単に評価できます。子どもの健康状態を記録したら、かかりつけの小児科医と一緒に確認しましょう。

母子手帳の後半部分は育児に役立ちそうなエッセンスが（思春期に至るまで）書かれていて、一番手近な育児本として活用できますよ。ぜひ読んでみて！